

★「人が義とされるのは信仰によるのであって教会の説く善行によってではない」とは？

人が苦悩から解放され希望をもって自立して生きられるようになる（＝人が義とされる）のは、「神に比べて不完全で弱小で罪深い自分が、（不完全で弱小で罪深いにもかかわらず）神によって愛され、かけがえのない人生を他者と共に一生懸命に生きていると自覚する」ことによってであって、単に「免罪符を買った」からではない、という意味。

もっと簡単に言えば、「正しい人」とは、「免罪符を買った人」（表面的・偽善的な行為）ではなく「愛を実践する人」（神を愛し隣人を愛しながら生きている人）である、ということ。

このことは、パウロの信仰義認論と同じく、業績達成主義の否定を示している。

なお、パウロの場合と同様、ルターの信仰義認論にも「否定の否定は強い肯定」の脈絡がある。つまり自己を一度「罪深く不完全で弱小な存在」として否定しつつ、そんな自分をそれでも「神は愛している」ともう一度否定することによって、神に対する強い信頼と自己肯定感が生まれている、という脈絡である。この脈絡を理解することは、後で日本の仏教（親鸞の思想＝悪人正機説）を学ぶときに役立つ。

★ルターの思想のどの点に「脱呪術化」を見いだすことができるだろう？

「免罪符を買えば罪が許される」など聖書に根拠の無い呪術的（魔術的）な説明をする教会を批判し（その権威を否定し）、聖書の言葉だけに根拠をおいて考えぬいた点。

ところで多くの日本人は、ルターのように明確な根拠に基づいて可能なことだけを実行しようという精神に乏しい。日本の多数の政治家たちが「憲法は理想（建前）であり、現実はその甘くない」などと言いながら憲法を無視する政治をするならば、それは聖書を無視して免罪符を販売していた昔のカトリック教会と同じということになる。